

## 史跡甲斐国分寺跡への道のり

明治時代に入ってから、聖武天皇によって創建されたという由緒が重要になっていきます。明治に入ると多くの寺院は、徳川家から与えられた寺領とそれを保障した朱印状を明治政府に没収されました。しかし甲斐国分寺は、徳川家の朱印状は没収されたものの、皇室ゆかりの寺院の「勅願門跡」であるため、御朱印地分の寺領はそのまま与えられました。

明治四十五年(一九二二)の三月二十七日から四月四日まで、皇太子(のちの大正天皇)が山梨県に行啓したときは、国分寺は皇太子が訪れることを願ひ出しましたが、叶えられませんでした。しかし、記念のために勅願門跡の旨を記した石碑が建てられ、今も残されています。また、このとき薬師如来が開帳され、新たに下馬札と薬師如来の御札が刷られました。その版木は現在も国分寺に残されています。版木の裏面には、皇太子が山梨県を訪れた、三月二十七日から四月二日まで、開帳したことが記されています。

大正八年(一九一九)に史蹟名勝天然記念物保存法が施行され、国の指定以外に、県による史跡の仮指定が可能になったため、山梨県は、大正十年(一九二二)に国分寺を史跡にしました。同年八月には、内務省の調査官柴田勝恵が国の史跡指定のために国分寺へ調査に来ています。その結果、翌大正十一年(一九二二)に「甲斐国分寺跡」は、内務省から山梨県最初の国史跡に指定されました。

なお、大正十年十二月に、柴田氏によって国分尼寺跡の調査が行われています。この調査は、一宮尋常高等小学校(現一宮西小

学校)の校長で、郷土史家であった水上文淵が、国分尼寺跡の礎石と瓦の拓本を、柴田氏へ提供したことが契機になっています。しかし、このとき国分尼寺は史跡になりませんでした。

ところで、大正十年二月に、山梨県が史跡の管理と保存費の補助制度を開始したことをうけて、国分寺はその補助金を申請しています。しかし、制度の趣旨として一般人への文化財保護意識の醸成を目指していたことから、国分寺は補助金を檀信徒の寄附で賄うことにしています。

このとき、国分寺が保存の対象としたのは、金堂と七重塔の礎石でした。とくに七重塔の礎石は、大正十年(一九二二)に「史蹟保存費補助願 護国山国分寺蔵」の寄附で賄うことになっています。



写真「国分寺七重塔礎石」(出典:水上文淵『史蹟名勝天然物 一』) 大正12年(1923)頃 山梨県立博物館蔵

# シンボル展 甲斐国分寺

令和6年 12月21日(土) 令和7年 ~2月24日(月)

### 甲斐国分寺―護国・薬師・史跡の歴史―

笛吹市一宮町国分区にある史跡甲斐国分寺跡。その歴史は、聖武天皇が、天平十三年(七四二)に、全国六〇あまりの国のそれぞれに寺を一つ建てる「国分寺建立の詔」を發布したことに始まり、その命令に応じて甲斐国にも国分寺が建てられ、およそ一三〇〇年を経た現在においても、その遺構や遺物が保護され調査・研究が進められています。ここでは、最新の発掘調査と、本展覧会の開催にあたり実施した古文書調査の成果を踏まえて、甲斐国分寺の歴史の一端を紹介します。

### 甲斐国分寺の創建

甲斐国分寺は、奈良時代に聖武天皇の命令により建てられました。その創建の背景の一つに、聖武天皇の後・光明皇后の意思が強く関わっていました。

「国分寺建立の詔」が發布される以前、天平九年(七三七)に、九州と京都で天然痘が流行しました。光明皇后の兄弟である藤原氏四人を含む、多くの朝廷の役人が亡くなったことで、政務が停止しました。当時、天然痘は仏教上正しくない行為をした者に下される罰と考えられており、政争のなかで皇族の長屋王を死に追いやった、

重塔については、現在、自由に見ることができませんが、当時は石積を築いて、木材と有刺鉄線で囲い、標札を建てていた様子が写真からわかります。このほか、維持管理のために芝刈りなど清掃の補助金も申請しており、史跡として保存が図られています。

こうした補助金は、国分寺の住職を中心に、寺の経営などに携わっていた檀信徒たちによって管理・運用されました。また昭和五年(一九三〇)頃までに「史蹟国分寺保存会」が発足しており、会も含めた形で史跡の保存が進められました。一宮町の少年団が芝刈りをしたり、青年団が史跡保存活動の一つとして国分寺の標札を建てるなど、地域の人たちも保存活動に参加しています。こうした地域住民を中心とした史跡保存のありようは、第二次世界大戦が激化していく昭和十七年(一九四二)頃に、人手不足により檀徒が寺院経営から手を引いたため、縮小していったと考えられます。

戦争が終わったのち、昭和四十五年(一九七〇)に、道路拡張のために山梨県が発掘調査を行って以降は、一宮町が主体となり史跡整備に伴う発掘調査が進められました。このような調査研究は、平成十八年(二〇〇四)の合併により誕生した笛吹市に引き継がれるとともに、現在は史跡整備に向けた取り組みが進められ、それに伴う活用が行われています。

勤めた大伴氏や甲斐国造の祖とされる日下部氏などが、建築に関わっていたと考えられています。

### 甲斐国分寺の屋根には、鬼瓦や軒丸瓦、軒平瓦など多くの瓦が葺かれていました。

瓦の文様の一つとして、軒丸瓦には「素弁八葉蓮華文」、軒平瓦には「均整唐草文」があります。甲斐国分寺の北西に位置する上土器遺跡(甲府市)からは、これらと同型の瓦が出土しており、国分寺・国分尼寺に瓦を供給した瓦窯の一つと考えられています。また、初期の甲斐国分寺の瓦の文様と国分寺創建以前から存在する寺本廃寺(笛吹市)の瓦は、どちらも百済系とされます。そのためいずれの寺院の造立にも、百済系渡来人が関与していたと考えられています。

また、出土した瓦の状態から、瓦の正面である瓦当に文様をつける型枠が摩耗した場合に、仕上がりやヘラなどで修正したり、あるいは型枠を補強・補修したりしながら、大量の瓦が作られたことがわかります。



均整唐草文軒平瓦 奈良時代 護国山国分寺蔵

唐草文が中心飾りから左右対称に4回転する。平城宮の瓦の影響を受けた、甲斐国独自の文様。

このほかに、金堂から講堂の正面にかけて石敷で整備されていることが確認されています。こうした石敷は、全国の国分寺のなかでも珍しく、史跡甲斐国分寺跡の特徴として注目されています。



瓦の型枠の劣化が進み、外区がつぶれているほか、中心部の文様にキズが生じている。ヘラで刺してひび割れを補修するが、なおひび割れている。



瓦の型枠の劣化により、外区の二重圏線が一部つぶれている。またひび割れ補修のため、ヘラで刺した跡が見られる。



素弁八葉蓮華文軒丸瓦 奈良時代 護国山国分寺蔵

瓦の中心部や外区の二重圏線の文様が明瞭で、瓦の型枠の損傷がほとんど見られない。



甲斐国分寺の再興と薬師信仰  
平安時代の甲斐国分寺については、あまり詳細な記録がありません。なお、鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』には、全国の国分寺の動向について記されており、そこから、文治二年(一二八六)に東海道諸国の国分寺の損壊状況の調査、建久五年(一二九四)に鎌倉近国の国分寺の修繕、寛喜三年(一二三三)に風雨・水旱などの災難除けのために、最勝王経の転読が行われたことがわかります。おそらく甲斐国分寺も同様な状況であったと推定されます。

さて、国家を守るために祈りを捧げる大事な役割を担った甲斐国分寺でしたが、建長七年(一二五五)の火災によって、建物は焼失したと伝えられています。その後の再興の経緯は、『由緒書』(慶応四年(一八六八)成立)や『取調書』(明治二十八年(一八九五)成立)などによると、奇跡的に焼失を免れた本尊である薬師如来の仏像は、十年後に郷里の信徒が建てた小堂に安置されたようです。また、応安年間(一三六八―一三七五)に秀山傑が住職になり、文安年間(一四四一―一四四九)の再度の焼失を経て、永禄年間(一五五八―一五七〇)に武田信玄が再建しています。

実際に、至徳四年(一三八七)までに秀山傑が、国分寺の住職であることが『塩山抜隊語録』から確認できます。また、長享三年(一四八九)に河村信貞が広厳院(笛吹市)へ寄進した土地は、『林辺』(林部)のうちで『国分田』と呼ばれていました。奈良時代に甲斐国分寺が建立された地は、『林戸郷』であることを踏まえると、中世には国分寺の田地の一部が、寺領から離れていたと考えられます。その後、武田信玄が再興

したことを裏付ける、武田勝頼の古文書が国分寺に残されています。その内容は、勝頼が国分寺の住職快岳宗悦に対して、父信玄が与えた二貫文の寺領を保護することを約束しています。

こうした再興のなかで薬師堂(小堂)が建てられた場所は、創建時に金堂があった場所であることがわかっています。

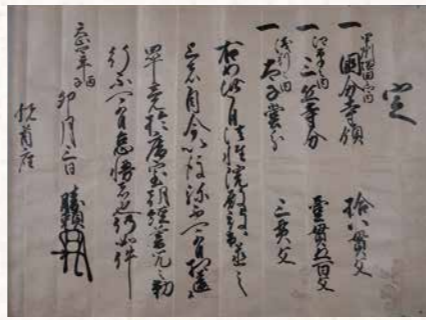
薬師堂に安置されている薬師如来は、三年に一度開帳する秘仏です。開帳するとき、国分村の領主である田安徳川家の代官所へ届出を行い、甲府の札辻(現甲府市中央信号交差点)に開帳する旨を伝える立札をすることで、甲府から国分寺へ参詣者が集まるように促しています。そうして、人々が来ることによって、国分寺周辺の地域が賑わい経済活動が活発になり、村々の発展につながったものと考えられます。

また、国分寺の境内に「塔だけある石でできた塔の『薬師経石當』は、側面に「当邑永代疫神悉除祈攸」と記されていることから、国分村から疫病を祓うために建てられたことがわかります。その下からは、一つの小石に『薬師瑠璃光如来本願功德経』に記載されている、漢字一文字を書いた「二字一石経」が発見されています。その文字は僧侶が書いたと思われるきれいな字以外に、拙い字もあり、僧侶だけでなく様々な立場の人々が、経石に字を書いたと考えられます。

薬師如来は、国分寺のみならず、国分村にとっても重要な位置をしめるものであり、広く信仰を集めていた様子がうかがわれます。



国分寺  
江戸時代 一宮町国分区蔵  
国分村・金川原村境村絵図  
江戸時代の国分寺の姿が描かれている村絵図。金川からの用水路沿いに人家が立ち並んでおり、国分寺周辺がある程度栄えていたようすがうかがえる。



武田勝頼判物 天正4年(1576)  
護国山国分寺蔵  
武田勝頼が信玄の時と同じように寺領を保障することを伝えた古文書。信玄は国分寺を再興することで、周辺地域の民政の安定を目指したと考えられる。



薬師三尊像と厨子  
年代不明  
護国山国分寺蔵  
中央に薬師如来坐像、脇侍に日光菩薩立像、月光菩薩立像が配されている。普段は厨子に納められ、33年に1度開帳される。厨子の五七桐紋と菊紋は、大正11年(1922)の内務省の史跡指定とほぼ同時に、宮内省から使用が許された。



薬師経石  
文政10年(1827)  
護国山国分寺蔵  
写真提供:笛吹市教育委員会



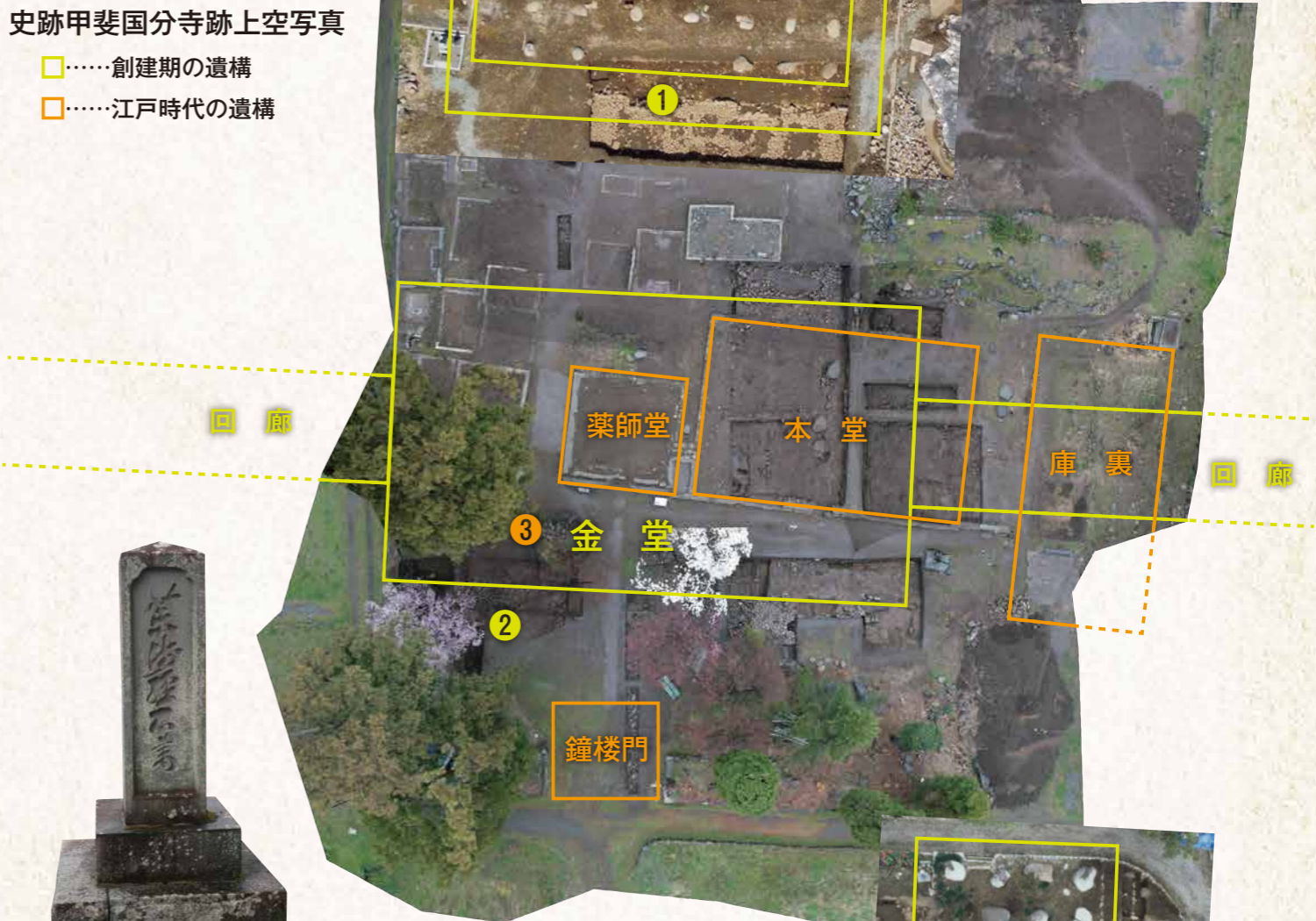
② 金堂基壇・正面の石敷  
金堂の基壇を構成する石列とともに、平坦な石が敷き詰められているようす。回廊内側の広場には平坦な自然石が敷かれていたものと思われ、「石の寺」との異名があったのも頷ける。



① 講堂正面のようす  
講堂の正面3か所に階段が設置され、建物の前面には平坦な石が敷き詰められていた。金堂と講堂の間は石敷の広場となっており、儀礼空間とされていたと考えられる。

史跡甲斐国分寺跡上空写真

- ……創建期の遺構
- ……江戸時代の遺構



③ 薬師経石當と薬師経石の埋納のようす  
石塔の下には一字一石経4,896点が埋められていた。薬師經典に使用されている文字が、一つの石に一字ずつ墨書されている。薬師経の一字一石経は全国的にも希少な事例である。



七重塔  
七重塔の礎石は金堂や講堂と異なり、石を加工し、柱の台を造り出している。これは七重塔を特別な建物として荘厳化する意図があったからと考えられる。